

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 近藤康久

本論文は、情報技術の一環として近年著しく発達した地理情報システムを考古学に応用する新しい研究方法の開拓と実践の試みである。具体的には関東南西部における土錘・石錘という縄文時代の漁網錘について悉皆的に時間的地理的変異を分析し、当時の海や大小河川など漁場との関係を分析したものである。もっともこれらが漁網錘であるということ自体、学界には異論もあり、本論文も前半ではその用途を未解決のものとして取扱い、本論文の分析結果としてこれらが漁網錘であることが確実に証明されるという順序がとられる。

考古学という、多くの場合比較的単純でありながら量的に膨大な資料を扱う学問では、コンピュータによる情報処理の能率化に大きな期待が寄せられ、とくに考古学の基礎作業である、遺跡・遺物の地理的分布の表示・読み取りの能率化に対する期待は大きい。

しかしながらこれを実行に移そうとすると、気付いた事実を文章で書き記し思考してきた記述的論文と違い、考古学情報をコンピュータに処理させるために、データを同じ形に統一することが必要になる。しかも考古学情報は不規則な欠落だらけである。普段さほど気にせずを選択し判断してきた属性も、統一した形で表示しようとする、恐ろしく煩瑣で時間を要する作業になることが論文の進行とともに明らかになる。作業の能率化どころか、コンピュータを使うために膨大な基礎作業の手間が要求される。しかしながらこの過程において、従来の研究が、直感で属性を拾い読みし、結論を導いていたことが暴露され、すべてのデータを客観的に処理しなければ真に客観的な結論には到達できないことに気付かされる。

本研究では遺跡発掘調査の偏りからくるバイアスを補正する方法が考案され、漁場と居住地の関係が直線ではなく、谷沿いの行程として評価され、その距離と錘具の出現頻度が統計学的に検討されるなど、データの徹底的に客観的な分析が工夫された。その結果得られた石錘と土錘の分布地と漁場地の関係、錘の重量と漁場環境の違いから推定される漁法の違いなどは、従来の研究にはなかった説得力を有する。

本研究では南西関東のみを扱ったが、さらに漁撈活動が盛んであったとみられる東関東をその対象に含めることが、今後の課題として要求されるし、作業量が数倍になるため、錘具の出土しなかった遺跡が比較の対象として取り上げられなかったことにも不満は残るが、本研究において基本的な分析方法が開発され、縄文人の漁業活動を従来になく客観的に確実に把握する道が開かれたこと、この分析方法が拡張可能で、今後データの拡張によって他の地域、他の研究者にも分析の方法を提供すること、さらにデータの比較的小さな改編で、他の種類の遺物・遺構にも適用可能であることを考慮すると、本研究における方法論的確立を、博士学位授与に値する業績と認めることができる。今後のさらなる研究の発展を期待するものである。